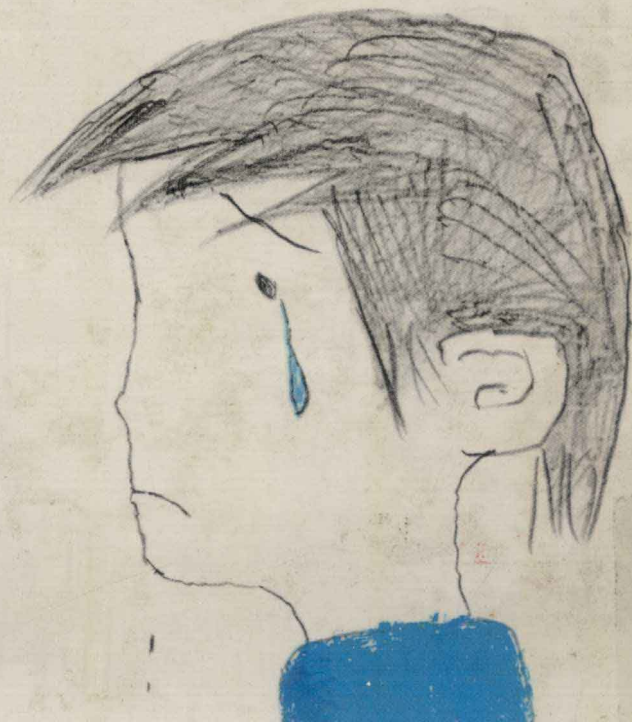


なきむしどうし

山下明生・作

鈴木義治・絵





作家

山下明生

（やましたはるお）

一九三七年、東京に生まれる。瀬戸内海の能美島で育つ。京都大学文学部卒業後、児童向け雑誌・単行本の編集者として活躍。著書に、「しつぽなしさん」(偕成社)「はんぶんちゅうだい」(小学館)「いきんぼの海」(あかね書房)「てがみをください」(文研出版)などがある。神奈川県在住

画家

鈴木義治

（すずきよしはる）

一九一三年、横浜に生まれる。映画宣伝美術から出版関係に入り、新聞・雑誌・単行本にと幅広く活躍している。絵本に、「子もりじぞう」「一つの花」(以上ポプラ社)「つりばしわたれ」(にげだした学者犬)「以上岩崎書店」や「まからきたともだち」(金の星社)など。横浜在住

カラー版

創作えばなし

29

なきむしどうし

1977年3月

印刷

1977年3月

発行

©

作

山下明生

絵

鈴木義治

発行者

久保田忠夫

発行所

ポプラ社

東京都新宿区須賀町5

写植

誉工房

製版

光明社

印刷

名古屋美術印刷株式会社

製本
大成紙工業所

本はいつでもおとりかえいたします

8093-003029-7764



なきむしどうし



山下明生・作
鈴木義治・絵

Ⅰ

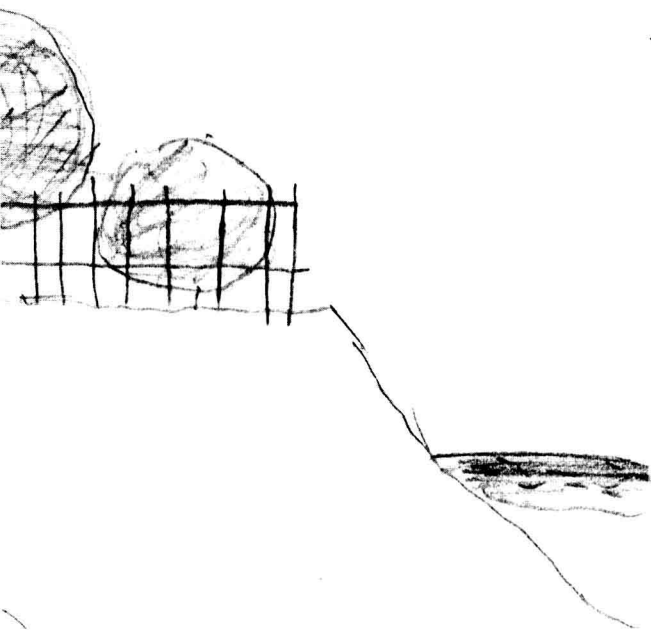
みなと小学校^{しょうがっこう}は、海^{うみ}のそばの 小^{ちい}さな 学^が校^こです。

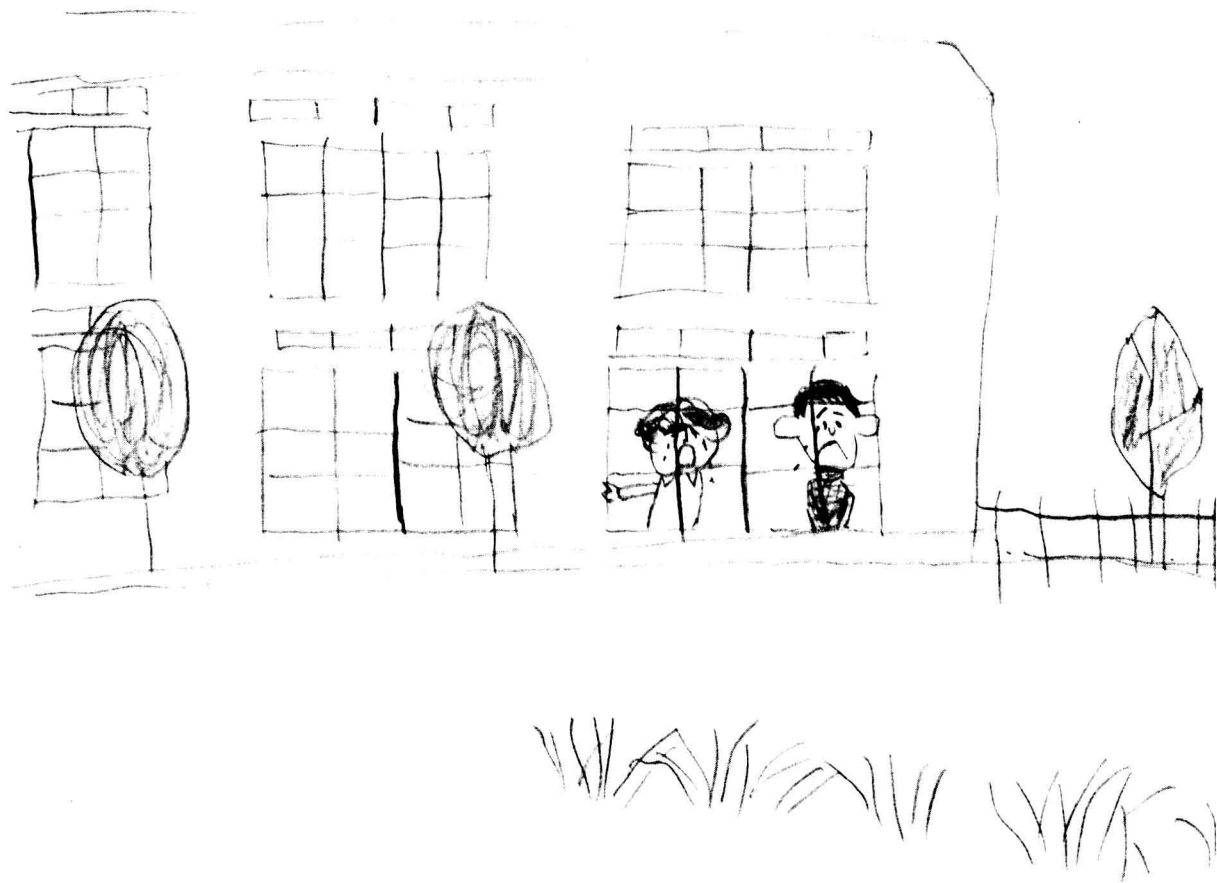
アツシ^{あつし}は、みなと小^{しょう}学^が校^こ 二^に年^{ねん}二^に組^{くみ}の せいとです。

みなと小^{しょう}学^が校^この 二^に年^{ねん}二^に組^{くみ}には、虫^{むし}が 二^にひき います。

といつても、ほんとうの 虫^{むし}では ありません。

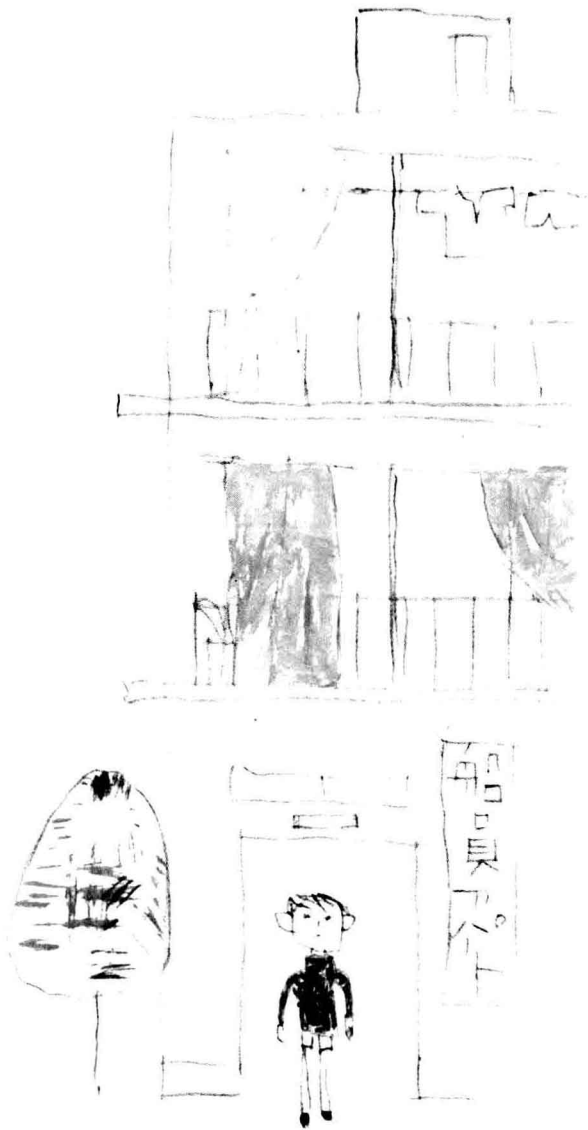
“なきむし”という 虫^{むし}です。





なきむしの 一^{いっ}ぴきは、ヒロシ^{ひろし}です。

船員^{せんいん}ア^あパ^ぱート^{ーと}から きている 子^こで、だれかが なくと、
すぐ なきます。もらいなきの 名人^{めいじん}です。いつも
なみだで あらっているせいか、とても きれいな 目^めを
しています。



そして、もう一^{いっ}ぴきの なきむしが、ア^あツシです。
パ^ぱンやの ひとりっ子^こで、メ^めロ^ろンパ^ぱンのように まるい
かおを しています。はしらにでも、おかあちゃんの
ス^すカー^かト^とにでも、しがみついて なくので、セ^せミ^みみたいだと
おきやくさんに わらわれます。



ヒロシと アツシが いっしょに なくと、二年二組の子どもたちは、

いもむしちゃん

はねが はえたら モンシロチヨウ

なきむしちゃん

なみだを ふいたら 男の子

いもむしちゃんは おとなしい

なきむしちゃんは やかましい

と、みんなで つくった “なきむしちゃんの うた” を
がっしょうします。

すると、二ひきの なきむしは、ますます 大声で
なくのです。



こうなったら もう、
校長先生が こうちょうせんせい きても、
おまわりさんが きても、
とまりません。
だから、うけもちの
白水エツコ先生は、しらみずえっこせんせい
ふたりを うんどうじょう 運動場の
すみの すな場ばに
つれていって、そこで
気が き すむまで、
ないてもらうことに
しています。

けさも アツシは、目ん玉が とけるほど なきながら、

海^{うみ}ぞいの 道^{みち}を、学校^{がっこう}まで あるいてきました。

かわいがっていた ヒヨコの ピツピが、しんだからです。

ピツピは、この 春^{はる}休^{やす}みに、アツシが 船^{ふね}つき場^ばの

ところで ひろってきた ヒヨコです。

きつと、船^{ふね}に のせられるとき、はこの あいだから

こぼれおちたのでしょう。はど場^ばの 石^{いし}がきの みぞに

はまって、ふるえながら ないていました。





ピッピは、おかしな ヒヨコでした。

ボールはこに いれてやっても、すぐに はいだして、

アツシの 足を おいかけてくるのです。ごはんの ときも、

きまつて アツシの ひぎに のぼってきました。夜

ねるときも、アツシの ふとんに もぐりこんできました。

いちどなんか、学校まで ついてきたことが ありました。

おいかえしても おいかえしても ついてくるので、

しかたなく、学校まで つれていったのです。

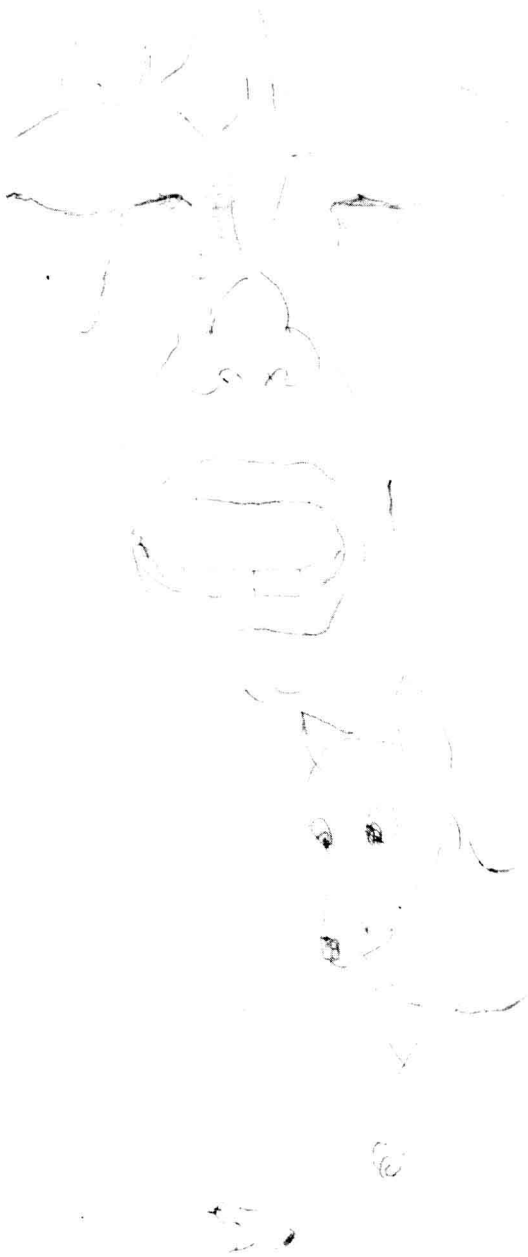
アツシが、「ピッピ！」と よぶと、どこに いても、

はねを ばたばたさせながら はしってきました。

まるで、アツシの ことを、じぶんの おかあちゃんだと

おもっているようでした。

その ピッピが、きのうの タ^{ゆう}がた、しんだのです。
アツシ^{あつし}が かいものに いくのを おい^{おい}かけてきて、
のら犬^{いぬ}に やられてしまったのです。ピッピ^びの なき^{こえ}声^{こえ}を
きいて、あわてて ふりかえったのに、おそろしかったです。
犬^{いぬ}が 前足^{まえあし}で おさえただけで、ピッピ^びは ころんと
しんでいました。



ゆうべ アツシは、しんだ ピツピを ハンカチに

つつんで、ふとんに いれて ねました。

そしたら けき、おかあちゃんに、

「しんでしまったもの、しかたがないでしょ。どこかに
すててきなさい。」

と、しかられました。

アツシは、朝ごはんも たべずに、ピツピを ポケットに

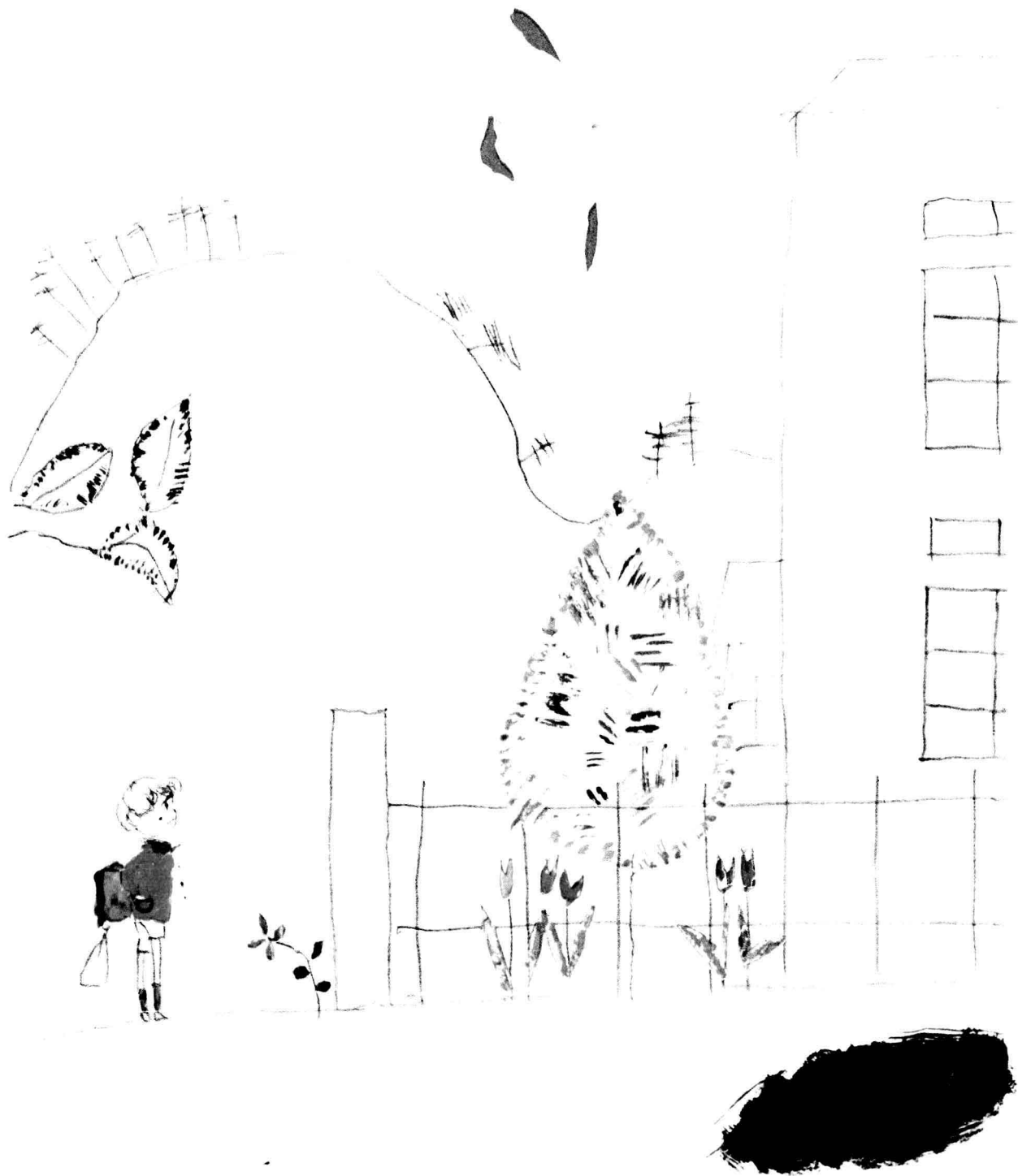
いれて、家を でした。

だけど、ピツピを 海に すてることは、かわいそうで

できません。土に うめることも、どうしても できません。

アツシは、ハンカチに つつんだ ピツピを ポケットに

いれたまま、なきなき 学校まで きてしまいました。



こんなに 朝^{あさ}はやく 学校^{がっこう}に きたのは、うまれて
はじめてでした。

校庭^{こうてい}に ハト^{はと}が おりて、おいかけっこを していました。
それを みると、アツシ^{あつし}は、よけい かなしくなりました。

ピッ^ぴピも きのうまで、あのように げんきに
はしりまわっていたのです。

アツシ^{あつし}は、なきながら 教室^{きょうしつ}に はいりました。
なきながら、じぶんの せきに すわりました。

そのときです。どこかで 声^{こえ}が しました。

「なくんじゃ ないよ。ないたら ころされるよ。」

アツシ^{あつし}は、おもわず こしを うかして、あたりを
みまわしました。

教室きやうしつの中なかは もちろん、運動場うんどうじやうにも だあれも いません。

天てんじようや はしらの ふしあなが、まるで いきている

目めのように、たったひとり

すわっている アツシあつしを

みています。

黒こくばんも、つくえも、

まどガラスがらすも、いきを

ころして、アツシあつしの

ようすを うかがっています。

きゆうに きみが わるく

なって、アツシあつしは、運動場うんどうじやうへ

にげだしました。

